

四、方便門

一、論の註に云く

「三者依方便門憐愍一切衆生心。遠離供養恭敬自身心故。正直曰方外己曰便。依正直故生憐愍一切衆生心。依外己故遠離供養恭敬自身心。」

菩薩が方便門を成就せんとするのは、業苦の一切衆生を憐愍せんとするが故である。一切衆生を大悲によつて憐愍せんとすれば、自身を供養し、自身を恭敬せんとする心を遠離しなければならぬ。

しかるに我等は前に、智慧門に依るが故に、自樂を求めず、慈悲門に依るが故に、一切衆生の苦を抜かんとすることを聞いた。この第一門及び第二門なくしては、第三方便門はあり得ない。何となれば智慧によつて、我心を遠離し、慈悲によつて、無安衆生心を遠離して抜苦の意志を成就せずば、何によつて、衆生を方便し憐愍することが出来よう。又、悲智二門も亦、限りなく衆生の上に利他成就するところの方便心とならないならば、悲智二門も如実のものではあり得ない。されば、悲智二門双運して、益物自在なるを方便門と言われるのである。

一、方便の二文字について、鸞師は、「正直曰方外己曰便」と積された。方は正直と云うことであり、便は己を外にして、他を内にすることである。

方とは方正の義であつた、菩薩の智慧を示されたものである。智慧は、真如法性を照らす光である。而して真如の本性は、自他同体である。菩薩の智慧は、真如の同体を知るが故に、自他の上に隔執を持たない。この自他に隔執を認めない心即ち正直の心である。この智慧、即ち正直の心が、「一切衆生を憐愍するの心を生ず」るのである。しかるに凡夫は、この真如の本性に背いて、自他の差別を隔執するが故に、又懇親中を見るのである。この懇親と隔執とを以て人に対するもの、即ち凡夫の邪見である。この邪見より、衆生を憐愍する心を生ずることは不可能である。菩薩は自他同体を了したまうが故に、懇親を見ず、隔執を見ず。故に正直と云うのである。この智慧よく一切衆生を憐愍するの心を生ずる、智よく悲を生ずるのである。この智慧に即する無縁の大慈悲を「方」と云うのである。

次に「便」とは慈悲を示す言である。便とは便宜で、其機宜に応じて、自己の為にせず、他の為にするを云うのである。宛も、母が嬰兒を内に温かくして、己を外に寒さを忍ぶが如くである。又、便とは、「傍」の意である。言うところは、正殿に非ざるを便殿と云い、正座に非ざるを便座と云うが如くである。慈悲は必ず他を正とし、己を便とする。この慈悲あるが故に、智を資けて如実たらしめるのである。

一、論主は「方便門に依つて、一切衆生を憐愍するの心なり。自身を供養し恭敬する心を遠離するが故に」と説かれたるに對して、曇鸞は、「正直に依るが故に、一切衆生を憐愍するの心を生ず。己を外にするに依るが故に、自身を供養し恭敬する心を遠離せり」と説かれた。

「方」即ち「正直」に依るが故に一切衆生を憐愍するの心を生ずとは、前に述べたるが如く、智より悲を生ずることを示されたのである。正直とは、自他の間に、隔執と懇親とを見ない菩薩の智慧であつた。この自他平等の智慧のみ、一切衆生の真相を知る所以であり、業苦の衆生の真相を知るが故に、憐愍の心を生ずるのである。であるが故にこの正直の心の中には、既に、慈悲門に於いて説かれたる、遠離無安衆生心の義を含むことを知るのである。智慧の正直に依らずして、如何して内、我心を遠離し、外、衆生に不安を与ふる心を遠離することが出来よう。一切衆生を憐愍する無縁の大悲は、かくして正直の心より生ずるのである。

一、次に、外己の心が、「自身を供養し恭敬する心を遠離する」のである。これは、慈悲よく智慧を資くる義である。即ち外己の慈悲に依つて自身に着する心を遠離するのである。

自身の利養を求むる心をここでは「供養」と言われ、自らを愛重して名聞を求むる心を「恭敬」と言われるのである。本来は恭敬は、自らを卑謙し他の徳を推戴くを恭敬と言われるのであるが、ここには、その反対で、他を卑しめ自らを高くするを恭敬と言われたのである。「自身を供養し恭敬する心」凡夫の、己を内にし他を外にするところの慈悲なき相に外ならない。しかるに我等は既に智慧門に於いて、智慧に依るが故に「自樂を求めず」と聞いた。自身を供養し恭敬するとは畢竟、自樂を求めるに過ぎない。この自樂を求める心を遠離することが出来るのは、外己の慈悲によることが示されるのである。依つて慈悲のみがよく智慧を資けて如実たらしめると言われるのである。

以上によつて方便門こそは、慈悲、智慧の二徳に対する障を双つながら遮する道なることが知られる。誠に方便心とは、無我の大慈悲の現行の相である。衆生の苦悩を見てこれに同感せず、憐愍せざる心は、所謂利己心であつて正直の心ではなく、又、己を外にする能わざる自我愛は、己の為の供養と恭敬とを求めて我欲の相を取る。この利己心と自我愛とは、根本に於いて二つのものではない。苦悩の衆生に同感憐愍しないが故に供養恭敬自身心を遠離しないのであり、自供養心を遠離することが出来ないが故に、大悲同感しないのである。智慧に依つて慈悲を、慈悲に依つて智慧を相資相成すること知るべきである。

一、「是名遠離三種菩提門相違法」

以上によつて、智慧門、慈悲門、方便門の三門に依つて、菩提に相違する法を遠離することが知られた。

誠に、智慧、慈悲、方便の三門こそは、浄土の広略止観相入する還相の菩薩の念願の内容であることがわかつた。しかるに、還相の菩薩の大悲願心は、そのまま本仏弥陀の大悲の願心なるが故に、この障菩提門の文字はこれを亦、大悲願心を示せるものとして頂くことが出来る。即ち

「依方便門憐愍一切衆生心」(方便門に依て一切衆生を憐憫したもうの心なり)

等の祖点は、全てこれを利他の大悲として拝せられたものであり又、最初の文に

「菩薩如是善知回向成就即能遠離三種菩提門相違法」（菩薩是の如く善く回向成就したまえるを知らば即ち能く三種の菩提門相違の法を遠離するなり）との訓点を施された所以も知られることである。

さればこの三心は、畢竟穢国に還相して願生浄土に生きる菩薩の一心の内容に外ならない。如来の願心に生きる還相の菩薩のみ、一、貪著自身 二、無衆生心 三、供養恭敬自身心の菩提の障碍する心を遠離するのである。我等はこの還相の菩薩の廣大なる願心を聞いて静かに内観の世界に帰入せしめられることではある。